

理解とは何か

哲学倫理学特殊 1H 学期末レポート

氏名：荒金彰

所属：文学部哲学専攻 3 年

学籍番号：12000555

(2) 最も納得できなかった考え

理解とは内的プロセスであるという主張に対して、ヴィトゲンシュタインが否定的な見解を示している箇所である。

36 ある人が、自分の場合は理解するということが内的なプロセスなのだ
とわれわれに伝える人がいたとして、われわれはその人になんと答えるだ
ろうか。—もし彼が、自分の場合はチェスのゲームができるということは
内的なプロセスなのだと言うならば、何と答えるだろうか。—彼がチェス
をできるかどうかをわれわれが知りたいときに、われわれにとって関心があ
るのは彼のなかで起こっていることではない。(原文ママ)

「心理学の哲学」第六章 36 節 この授業の第 7 回翻訳資料より引用

この節で提起されている問題は、次の問いに縮約される：「意味を理解して言葉を発する場合と、理解せずに発する場合の違いは何か」。

これに対する当初の私の考察は次のようなものであった。「発言者を口述試験に科すごとく、その発言内容について問いたすこと。そして、その問いに答えられれば答えられるほど、理解しているとみなす。そして問いただせば問いただすほど、当人が理解しているか否かの判定は、より精度の高いものになると思われる。なぜなら、偶然の適切な返答は 1 度や 2 度ならありうるが、偶然に多くの問いに連続して適切に答えられることは不可能と思えるからである。」

この考察がヴィトゲンシュタインの立場に与するものであることは、次の説明によって明らかである。目下検討中の問題は、当人の内部にある種の感覚があること（内的プロセス）をもって当人が理解しているとみなすか、あるいは当人が問いただされたら答えられること（適切な使用ができるという外的プロセス）をもって当人が理解しているとみなすか、という対立であるが、そこにおいて、当時の私とヴィトゲンシュタインの立場は、後者を支持している点で共通するからである。（また同 40 節では、「人が語の使用を我々がしているのと同じようにしているのなら、語の理解もまた我々と同じようにしていると思うだろう」という趣旨のことが語られる。）

しかしこれらの、理解の条件として外的プロセスを支持する立場には、次の問題がある。それは、この理論に対する反例、すなわち「語の適切な使用ができている者が、語の適切な理解を欠いている」という場合がありえることである。

ここには、中国語の部屋の問題、AI の記号接地問題などに通じる問題がある。それは、**現れと実態の乖離**という問題である。つまり、機械的にいかにうまく表面上では応答ができたところで、当の者が実際に理解していると私たちが認めたくない場合があるということである。

これらの問題は具体的に、試験における「正答」と「実際の理解」の隔たりに当てはめて考えられる。すなわち、問題の答案を丸ごと覚えて解答欄に記すことは、表面上回答はできている点数が与えられるとしても、生徒が実際に理解し、認識水準を向上させたことにはな

らない、と我々の多くは認めるであろう。あるいは「理解せずにただ模倣する」という表現を我々は認める。この表現を我々が認めるのは、**語の理解**と**語の使用**が別のものであると我々が認めているからである。

我々が知りたいのは、「**彼が駒を使用するチェスをできるか否か**」ではなく、「**彼は駒を使用するチェスを理解しているか否か**」である。

また、我々がここで検討すべき全ての事例は、以下の4つのいずれかに当てはまると思われる。

- 語を、
1. **理解できる、使用できる**：英語の文章の意味を理解でき、使用もできる場合。
 2. **理解できる、使用できない**：英語を聞き分けることはできるが、書くことも話すこともできない場合。
 3. **理解できない、使用できる**：ただ機械的に応答する。上で問題になった範囲。
 4. **理解できていない、使用できない**：未知の言語は理解も使用もできない。

この**4分類**すべてに、それぞれ何らかの実例が当てはまるということから、次のことが判明する：言葉を理解しているときには、それを使用することもあるしできないこともある。また、言葉を使用しているときには、それを理解することもあるしできないこともある。したがって、言葉を理解していることと言葉を使用していることは全く別のことであり、両者の間に因果関係もないことが判明する。

事例3より、言語の使用において意味の理解はなんら重要性をもたない。しかしまた同時に、事例2より、意味の理解においても言語の使用は何ら重要性を持たないのである。

このようにヴィトゲンシュタインの分析は批判される。しかし、言語理解の指標として外的プロセスを重視する立場はそれなりに説得力を持つ。なぜなのか、この理由も考えたい。私の答えは次のようなものである。

内的に「彼は理解している」ことを、外的に「私は、彼が理解しているとみなす」ことと、同一のものとみなす働きが、社会のなかにある。この働きによって、彼の外的な「言語の使用」は、彼の内的な「言語の理解」と同一である、と**擬似的にみなされる**。しかし本来厳密には、語の使用と理解は別のものである。

私はこの主張を分かりやすくするため、次の2つを説明しなければならない。①なぜこの同一化は完全には成功しないのか。②なぜこの同一化のはたらきがあるのか。

- ① ...彼が何かを理解していることを、私は確実な仕方で知ることはできない。それは彼が受け取る感覚を私が受け取ることができないのと同様である。「彼は理解している」という文章は、彼の**実態**についての記述であるが、実際に私が確認できるのは「彼が言語を使用している」という**現れ**だけである。先に私が「4分類」で示したように、実態（理解）と現れ（使用）は合致しているとは限らないからである。
- ② ...複数の人間が共生する場では、言語の理解を、その使用と同一であると**みなす**ことが重要な役割を果たす。それは次の経緯による。共同作業においては「他人が何を理解しているか」という実態の確認が要請される。なぜなら実態の確認なしには、彼が危険を察知しているか、危険を回避するのに十分な情報を有しているか知ることができず（「心の理論」が適用できず）、共同作業に綻びが生じるからである。そして、この共同作業ができるか否かは人間にとって致命的問題である。なぜなら人間は単独ではほとんど何もし得ない存在であり、狩猟においても、仕事においても、戦いにおいても、学習においても、他者との協力を必要とするからである。（この人間の置かれている状況が、まさに人間の言語の性質に関与しているのである。）

ところが、①でも述べたように、私が獲得しうるのは他人の言語使用という**現れ**だけであり、他人の言語理解という**実態**はいかに努力しようと**獲得**されない（彼の感覚が私は受け取ることができないのと同様に）。そのため、**実態の確認は、論理的確実性よりも前に先取りしなければならないことになる**。これがなければ我々は独我論の領域から脱出することはできず、共同体生活が建設され得ない。共同体建設の要請から、「言語使用」を「言語理解」と同一であるとみなすはたらきが生じたのである。

究極的には、私が本当に何かを理解しているか否か、他人は知り得ない。しかし、**みなす**（その事態を確信的な事実として定置し、そうではないという疑念を排除する）は**はたらきによって初めて、意識を持った他者が私に現象する**。前提「私は彼が理解しているとみなす」から、結論「彼は理解している」を導くとき、そこには**論理的飛躍**がある。しかしこの飛躍は、個々人を独我論から共通感覚 Common Sense（常識）へと導く、人類が共同体として力を発揮してゆくために不可欠な段階でもある。

理解するとは何か。通常は、語を説明（使用）できることが理解していることの証であり、「理解していれば説明（使用）でき、説明（使用）できなかつたら理解していない」とみなされるが、実際これには、先に挙げた 4 分類の事例 2,3 のように、反例がある。とはいえ、この外的プロセスが重要であるという考え方は、「自分が理解しているだけでなく、**知識を絶えず他者と交換してゆくことも我々の生きる社会では要求される**」ということから生じる、**社会の慣習的規範**である。そしてこの分析は、言語が他者との意思疎通するための道具であることとうまく合致する。

しかし厳密な意味での理解は、他人に証明できるか否かという問題に関係がなく、本人の内的プロセスのみで決まる。なぜなら、理解しているときだけに感じられる手応えや楽しみは、自分のみが感覚できるからである。（字数制限を超えるため、以下の論述は省略する。）

（1）最も納得できた考え

それは、次の箇所に表れるような、一見すると無意味な語の羅列を、ナンセンスなものとして切り捨てない考え方である。

278 二次的な意味とは「転用された(übertragene)」意味ではない。「私にとって、母音 e は黄色い」と言うとき、私は「黄色」を転用された意味でいっているのではない。—というのも、私は「黄色」という概念以外によつては私が言わんとすることをまったく表現できないのであるから。

「心理学の哲学」第十一章 278 節 この授業の第 13 回翻訳資料より引用

そもそも言語とは、従来の意味（一次の意味）から逸脱した二次の意味を持つものである。なぜなら、本来はただの線である文字に、ただの音である声に、意味をあらしめるのが言語だからである。言語とはそもそもその本性上、「二次的なものであること」を含んでいる。言語は、意味がなかった線・音に意味を持たせ、「なかった意味をあると**みなす**」ものだからである。

しかし同時に、言語に一定程度静止した文法がなければ、ひとつの言語として人々が共通に会話できる場所とはならない。

言語は静的/動的な要素の両方を含む、という言語の性質が捉えられているため、この考え方に納得した。

（以上、引用部分を除き 3723 文字）